

南港の野鳥たち—大阪南港野鳥園

写真は大阪市港湾局『大阪港築港 100 年』下、1999 年、巻頭の写真のひとつである。先日初めて行った大阪南港野鳥園について、標題コラムにより紹介したい。

大和川が大阪港に注ぐ海岸線は、昔から住之江の浦と呼ばれ、和歌にも詠まれた白砂青松の景勝の地であった。江戸時代に描かれた住吉大社の絵図には、干潟で潮干狩りを楽しむ風俗を見ることができる。この地域は渡り鳥の中継基地として、愛鳥家の間では東京湾の新浜、名古屋の知多半島、九州の有明海などと並んでよく知られている。国際的にも保護の対象となっているシギ、チドリ仲間、夏にはシベリア、カムチャッカなどの北方で繁殖し、冬は赤道直下の島々や遠くはオーストラリアなど南方で越冬する渡り鳥であるが、日本列島に点在する干潟は、その渡りの途上の鳥たちにとって、エネルギー源となる餌の補給と休息の場所として大切な役割を果たしている。

昭和 33 年に南港で埋め立て工事が始まったが、工事現場におびただしい数のシギ・チドリ類が飛来しているのが観察された。浚渫土砂のなかに渡り鳥の好む底生動物が多数混じっていたと思われる。野鳥園は、野鳥の生息する自然の生態的秩序を人工的に再現し、そこに野鳥と人が交流する場を提供しようとする試みであった。施設計画の策定に当たっては、鳥類をはじめ環境や土質など各分野の専門家の参加を得て、慎重な検討が繰り返し行なわれ、計画の対象とした優先種にはシギ・チドリ類 10 種とガン・カモ類 6 種が選ばれた。その理由は意外に知られていない。

ひとつは人と野鳥の触れ合いの場にふさわしく四季を通じてかなりの数の鳥が飛来することが望まれるが、シギ・チドリ類は 3 月の後半から 10 月の間に飛来数が多く、ガン・カモ類は、11 月から 4 月に多く見られる鳥種であるということがあった。2 つ目には鳥類によっては、大型の猛禽類などはほかの鳥を捕食することもあるが、シギ・チドリ、ガン・カモ類はお互いほかの種を排除することなく共存できることも重要な要素であった。さらに 3 つ目には、野鳥園の計画地に飛来しやすく、また学術的にも重要性が認められている鳥類で、かつその飛来地を確保する必要があったのがこれらの野鳥であった。

写真下は、野鳥園の休憩所にあった「干潟に集う鳥たち」の案内。たくさんの鳥たちが見えるが、常連さんに聞くと、最近では鳥の数もかなり減ったそうだ。でもまた訪ねたい。



渡り鳥の楽園、南港野鳥園 (昭和63年)



南港野鳥園の広大な干潟 (昭和59年)



(2020 年 4 月 26 日)